

## 幼稚園の思い出

福元 真由美

「ふたば みつばは すくすく そだつ……」、大好きだった幼稚園の園歌を今でもメロディーにのせて歌うことができる。わたしの通った幼稚園は、都心の町なかの神社の境内にあり、毎朝登園してくる子どもたちを大きな鳥居で迎えてくれた。幼稚園には三歳児一クラス、四歳児と五歳児がそれぞれ二クラスあり、外には大型の固定遊具のおかれた二

つのスペースと、境内の広場を利用した園庭があった。えんじ色でダブルボタンの園服につばのそり返った紺色の帽子（夏季は麦わら帽子）で登園するスタイルもかわいらしく、わたしも喜んで着ていたように思う。

幼稚園生活の思い出は、どれも断片的で、なぜこんなことを覚えているのだろうかとおかしくなっ

まうものも多い。梅雨の頃に雨が降ると、自分の保育室のある棟と離れにある一番広い遊戯室は、ビニールの円筒形のトンネルでつながれた。そこをくぐって集会や三歳児の保育室に遊びに行くのが、冒険みたいで面白かったこと。秋の運動会のおやつに出されるチョコチップ入りのスティックパンが、おいしくて大好きだったこと。冬に保健室で予防注射を受け、保育室にもどる廊下を「泣かない、泣かない」と自分に言い聞かせながら急いで歩いたこと。お弁当を保温庫にもっていく前に、いつも今日のお弁当は何か気になって、自分のロッカールの前でそーっとふたを開けて中を見ていたこと。

その他にも、誰かの吐いたものに気づかずクラスの女の子がその上を思いきり踏みつけた瞬間を見てひどく驚いたり、コーヒー牛乳を「コーヒーにゅうにゅう」という男の子に妙に幼さを感じたりした記憶がある。どれも四歳、五歳のわたしなりに園生

活を送っていた姿を思い起こさせるものであり、これまで自分の胸の中で大切にしてきた思い出だ。

このような思い出をたどっていくと、その後のわたしの学校生活につながっていった三つの経験にいきあたる。一つ目は、幼稚園の先生との関係についての経験、二つ目は先生から評価されるという経験、三つ目は自分の願いを実現させるという経験である。

一つ目の幼稚園の先生との関係についての経験は、わたしが四歳児クラスるときに片足を捻挫したことに関係している。なぜ捻挫してしまったのかは覚えていないが、登園して下駄箱でうわ履きにはきかえる時に、包帯の巻かれた足に不便を感じていたことは確かだ。また、和式のトイレにもうまくしゃがめない状態のため、トイレで用をたす時には先生に介助をお願いすることになっていた。

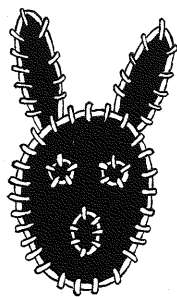
けれども、一人でトイレに行くことが当たり前

なっていたわたしには、先生にトイレの介助をお願いすることがなんだか気恥ずかしく、自分からお願ひすることができない。そんなわたしの様子を察ししてくれたのか、担任の先生はわたしをトイレに誘ひ、やさしく抱き上げて手助けをしてくれた。その抱きかかえてくれた先生の胸の温かさど、しっかりとわたしの足を支えてくれた腕の力強さが、わたしの心をつかえをとり除いて緊張した気持ちをほぐしてくれたように思う。さらに「この人には自分をゆだねても大丈夫……」、そんな先生への確かな信頼感を自分の思いとして確認することのできた出来事だった。

このような経験は、幼稚園を卒園してから小学校、中学校、高校にいたるまでのわたしの教師への信頼感の基礎になってくれたように思う。その教師を信頼する気持ちは、先生は自分を受け入れてくれるという思いに支えられたものだったと思う。

幼稚園の時のように自分の身を直接まかせるといふ方法ではなくとも、先生が自分を尊重してくれているということを感じることができたのかもしれない。

二つ目の先生から評価されるという経験は、絵を描くことと体で表現することの二つの活動における出来事だった。当時、クラスの一斉活動で描いた子どもたちの絵は、壁に飾られたあとに先生から評価の丸をもらってわたしたちの手元に帰ってきた。ある日のお帰りの時間に、先生が子どもの絵を返してくれることになり、一人ずつ名前を呼ばれて先生のところに行くことになった。自分の番になって先生



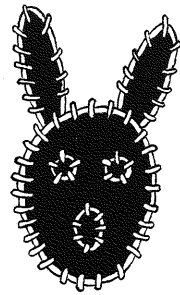
のところに行く、絵の画用紙の裏面に先生が赤いサインペンで丸を書いてくれる。わたしは、サインペンがぐるりぐるりと回る様子を見ながら、「三重丸だといいな……」と思っていた。経験的に丸の数の多い方が、「よくできました」という意味だということを知っていたのだろう。けれども、サインペンのペン先は丸を二つ描いただけで画用紙からはなれてしまった。「あーあ、二重丸か……、なんでかなあ……」という残念に思う気持ちと、なんだか釈然としない思いの混ざった感情を抱きながら、一人で保育室を出たのを覚えている。

もう一つの記憶は、これとは逆にほめられて嬉しかったという思い出である。お遊戯会で五歳児のわたしのクラスでは「かぐや姫」をやることになった。ひそかに「かぐや姫」役をやったのだが、わたしに割りあてられた役は「おばあさん」だった。少し残念だったが、出番もそれなりにあつ

たので気をとり直して練習に励んでいたように思う。ある日の練習で、かぐや姫が月に帰るところをおばあさんが見送る場面をやっていた時のことだ。先生が口を開いて「今ね、真由美ちゃんがこうやって（振りつけの身振りをそえながら）、かぐや姫が帰って寂しいっていうおばあさんの気持ちがよく出ていたよ」と、わたしを含む五人くらいのおばあさん役の女の子に言葉をかけた。

思いがけないほめ言葉に、わたしも最初は驚いた。それでも本当に嬉しくなってしまう、それ以降の練習でも、もちろん本番でも、おばあさんの気持ちを考えながらいていねいに踊ろうと心がけた。特に先生がほめてくれたあの部分、帰ってしまうかぐや姫を見つめながら、視線を斜め上にして足をずらして座り、両手をつけて上半身を二回上下する振りつけは、気持ちをこめて踊っていたように思う。

これらの二つの出来事は、表現の領域で評価され



ることの戸惑いと喜びをわたしに印象づけるものになったと思われる。小学校に入学してからも図工の作品の評価は、よくても悪くてもその理由の理解できないことも多く困惑することもあった。よくない評価でも、その理由がわかれば改善につなげていくこともできたと思うが、残念ながらなかなかそうはいかなかった。一方で、自己表現の楽しさとそれが認められる嬉しさの重なった思い出は、人前で自分のアイデアやイメージを言葉や体で表現し、それを他の人と共有していこうとする経験を支えてくれた。表現としては稚拙であっても、自分の思いを受けとめてくれる相手がいると思えることが、今でも心強くわたしの背中を後押ししてくれている。

三つ目の自分の願いを実現させるという経験は、保育室の目の前の廊下にあった一台のオルガンがもたらしてくれた。自由遊びの時間、五歳児クラスの前オルガンでは、ピアノを習っている子どもたち

が指の練習をしたり曲を披露したりしていた。当時ピアノを習っていなかったわたしは、友だちの指が器用に動いてメロディーを奏でるのをとてもうらやましくみていたと思う。そのためか、オルガンを弾いている友だちがいると、その周りを囲むようにしてよくいたものだった。

そして、友だちの弾く「ねこふんじゃった」の軽快な曲が、わたしに「オルガンを弾けるようになりたい」という願いを抱かせたのだろう。「ねこふんじゃった」を奏でる友だちの指の動きをみつめて、それを覚えようとしていたり、オルガンのあいているときには、自分で弾いてみたりしていた。それでも、

なかなか早い指の動きや両腕がクロスされて演奏される部分などは難しく、気のいい友だちに教わることもあった。そのようにして、ついに自分一人でも「ねこふんじやった」を弾けたときの喜びと満足感はとても大きかったように思う。しばらくはオルガンでよくこの曲を弾いて、弾けるようになった嬉しさと楽しさを味わっていた覚えがある。

この経験は、小さかったわたしに一つの自信をつけさせてくれた。いま思えば、この時の自信は、次の三つのこと——自分の願いをかなえるために、努力してそれを実現させた自分に出会えたこと、ころよく弾き方を教えてくれた友だちの存在も大きく、仲間から教わることの大切さを知ったこと、学ぶことによつて夢や願いを実現できると知ったこと——に支えられていたのではないだろうか。そして、このような経験が、その後も学びを重ねていくわたしを励ましてきてくれたのだと思う。

幼稚園の思い出をふり返ると、その後の自分の姿に重なるものもあって、とても興味深い。小学校に入学した一年生の時には、よく休み時間にハーモニカを練習して担任の先生に聞いてもらっていた。音符の読めなかつたわたしは、またもやピアノを習つて音符の読める友だちに「ド・レ・ミ・ファ」を教わつて、それを音符の下に書き込んで練習した。先生に聞いてもらえるのが嬉しく、少しドキドキしながら曲を吹いて、うまく演奏できるとシールがもらえるのも当時は喜んだ。わたし自身を受けとめて認めてくれる先生がいて、活動を支えてくれる友だちがいて、表現することを楽しんだり、成し遂げたことに満足したりする自分に出会つていく。このような大切な学びの芽を、わたしの幼稚園は「ふたばみつばは すくすく そだつ……」と、育ててくれたのだなと今になって大きな感謝とともに思う。

(東京学芸大学)